聖霊降臨後第２１主日（特定２６）　　木を降りてくること　　２０２２．１０．３０．
（延岡用）

宮崎の教会カレンダーには、諸聖徒日の聖歌や聖書の箇所を書いていますが、この特定２６は、旧約はエレミヤ書１４章７～１０，１９～２２、詩編は８４編、使徒書はⅡテモテ４章６～８，１６～１８，そして福音書はルカ１８章９～１４節です。これらを朗読してから、説教を読んでいただけたらいいと思います。紙面の都合で、この説教の綴りでは、諸聖徒日の説教は載せていません。

エリコの町というのは、エルサレムから３０キロくらい北東に行ったところにある、温暖な街です。そしてこの町は考古学的にも重要な遺跡が発見されていて、世界で一番低いところにあり、また世界で一番古い町だと言われています。

私は３６年前、初めてイスラエルへ旅をしましたが、このエリコに行くと、町のザアカイが登ったいちじく桑の木と同じ木がありました。大変大きな、高さが３０メートルにもなり、幹の直径は１メートル以上あります。枝も下の方から横に広がり、中には木の枝の端から反対の端まで、４０メートルもある木が、育っているようです。ですから、背の低いザアカイも、割と簡単にその枝に登って、イエス様を見ることができただろうと思います。

彼が徴税人という、同胞のユダヤ人たちから嫌われた職業の者であったこと。しかもその頭だった金持ちだったということから、人々の中で浮き上がっていたと言うか、背が低かったから、大勢の群衆の中では、道を譲ってももらえず、イエス様を見ようとしても、人々のアタマが邪魔をして、みんなから相手にもされない存在だったのだろうと思います。

そんな彼が木に登って、人々の目線を集めることになりますから、本当はそんなに目立ちたくなかったのではないか、と思います。しかし、彼がそれでも、評判のイエス様を見たかったのは、どうしてでしょうか？

今日の福音書はルカ１９章のはじめですが、その直前の１８章３５節から４３節には「エリコの近くで盲人をいやす」というお話があります。最後の４３節には、『盲人はたちまち見えるようになり、神をほめたたえながら、イエスに従った。これを見た民衆は、こぞって神を賛美した。』とあります。

盲人を癒したイエス様のうわさは、すぐにこのエリコの町にも伝わったのでしょう。そして、その癒しの話のちょっと前には、『ファリサイ派と徴税人』のたとえが書かれています。イエス様が、ファリサイ派の人々のことをこのたとえで批判し、徴税人のことをほめたような話をした、ということも、何となく、自分を理解してくれる方ではないか、という期待があったのだろうと推測されます。

このようにして、イエス様を先回りして木の上で待っていたザアカイですが、彼がビックリしたのは、一度もイエス様に会ったことがなかったのに、イエス様はザアカイのことをご存じで、彼にかけた最初の言葉は、「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」だったのです。

彼は、徴税人の頭で金持ち。背が低く、みんなからまともな人間として扱ってもらえなかった。彼はそんな孤独の中にいたのでしょう。ところが、どうやって自分の名前を知ったのか、そしてどうして嫌われ者の自分の家に泊まってくれる、と言うのか、彼は不思議さとうれしさがこみあげていたのでしょう。

彼は、イエス様を自分の家に迎え、うれしさのあまり、「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。」という発言をします。
それに応えて、イエス様は「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」と言われました。

この会話に、特にイエス様の言葉に、このルカ１５章から始まる、「見失った羊」「無くした銀貨」「放蕩息子」「不正な管理人」「金持ちとラザロ」などのたとえ話が、実際の人物ザアカイの生き方の中に現れているように思えます。

今回、久しぶりにザアカイの話について、いろいろ調べていたのですが、いちじく桑の木から、いろいろ連想することになりました。ザアカイが登ったこの木は、とても大きくて、この木からは、あまり上等とは言えないのですが、貧しい人々の食料として、いちじくに似た実がなります。

一方、イスラエルには、旧約聖書の５番目の書物、申命記８章に、名産品の７つの食物が紹介されています。『 8:7 あなたの神、主はあなたを良い土地に導き入れようとしておられる。それは、平野にも山にも川が流れ、泉が湧き、地下水が溢れる土地、 8:8 小麦、大麦、ぶどう、いちじく、ざくろが実る土地、オリーブの木と蜜のある土地である。』

いちじくがそれに入っていて、これは上等。そして、いちじくの木は高さがせいぜい３～５メートルくらいで、これは登るのではなく、その木の下は、大きな葉が茂って、熱いイスラエル地方でも日差しをさえぎって、気持ちのいいところになっています。

このいちじくの木の下にいた、イエス様のお弟子さんのことを皆さんは知っているでしょうか？
ナタナエルという人です。この人は、ヨハネによる福音書にしか登場しませんが、おそらく他の福音書の中に登場する１２弟子のひとり「バルトロマイ」と同じ人物だろうと言われています。

ナタナエルは、同じ弟子のフィリポの友達で、フィリポは何とかしてイエス様をナタナエルに紹介しようと、「わたしたちは、モーセが律法に記し、預言者たちも書いている方に出会った。それはナザレの人で、ヨセフの子イエスだ。」と言いますと「ナザレから何か良いものが出るだろうか」とナタナエルは答えます。

実は、このナタナエルは、ヨハネによる福音書の最後、２１章で、ガリラヤのカナ出身であることがわかります。そしてこのナタナエルとイエス様が出会ったあと、カナでの婚礼でイエス様は水をぶどう酒に変えるのですが、カナはナザレの隣村でライバルのように思っていたのでしょう。

ナザレ出身のイエス様に、あまりいい印象を持っていなかったナタナエルですが、フィリポが「来て、見なさい」と言うので、ついてゆくとイエス様はナタナエルのことを高く評価しています。

『 1:47 イエスは、ナタナエルが御自分の方へ来るのを見て、彼のことをこう言われた。「見なさい。まことのイスラエル人だ。この人には偽りがない。」』

こう言われて、ナタナエルがビックリして質問します。「どうしてわたしを知っておられるのですか」と言うと、イエスは答えて、「わたしは、あなたがフィリポから話しかけられる前に、いちじくの木の下にいるのを見た」と言われた。

ここでいちじくの木が出てきます。これに驚いて、 ナタナエルは「ラビ、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です。」と答えるのです。

いちじくは、イスラエルの人たちの貴重な食べ物ですが、その密生した木の葉は瞑想にふけるのに好都合でした。会堂（シナゴグ）がない小さな町では、人々は、いちじくの木の下で、ラビ（教師）と共に、律法を読み、討論し、瞑想していたのです。

「いちじくの木の下いる」という言葉は、当時のユダヤ人には簡単に通じる表現でした。それは、律法を読み、瞑想し、祈りの生活をしている、ということを意味していたのです。彼は、真剣に救い主が来るのを待っていたのでしょう。

私はいちじく桑の木といちじくの木を比べよう思っているわけではありません。ザアカイとナタナエルも比べる必要はないでしょう。ただ、わかることは、イエス様はザアカイやナタナエルと出会う前から、彼らのことを知って、彼らとの出会いを大切にしておられた。もっと言えば、相手を偏見なしに、一人の人間として見つめておられた、ということです。

出会う前に、人々からその人の名前や日頃の生活、持っている悩みなど考え、一人の人間として自分と向き合ってくださったイエス様に、ザアカイもナタナエルも感動したのでしょう。

そして、ザアカイは、それまで人々の偏見の中で、必死に自分を偉く見せようと、木に登ろうと上昇志向で生きていた生き方が、イエス様からの「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」という言葉で、木から降りて、今度は、ナタナエルのように、いちじくの木の下で、ラビ（教師）であるイエス様の話を聞き、それに従う者になっていった、ということです。

今週の特定２６の特祷のなかに、「どうか深く感謝してその計り知れない恵みを受け、常に力を尽くしてみ跡を踏むことができますように。」という言葉があります。

私たちがイエス様のように、相手と同じ目線で向き合い、相手の人の人格を尊重して、私たちの出会った人と共に、イエス様の歩まれた道を歩める者になりたい、と思います。